

南ア・前衛 大岩山

## 濁川(神宮川)

遡行日:10年5月30日

メンバー:三井(主、記録)、野澤

濁川だが地形図には神宮川と記されているのだがこれは70年代に呼称が神宮川に変更されたもの。

この変更については濁川下流にサントリーのウイスキー工場があり、濁川では工場のイメージを損ねるためにサントリーが変更させた、というウワサがあるが有りそうな話だね。

そのウイスキー工場の裏手の林道を濁川に沿って走ると直に堰堤があり林道はがっちりしたゲートで閉じられていて車はそこまで。

手早く支度を済ませ、スタート。谷に沿って林道を辿る。間もなく巨大な堰堤に出会う。右岸に道がついていて越えさらに進むと右岸から沢が入る。下降予定の「日向沢」だ。

本流には先ほどの巨大堰堤より更に巨大な二段の堰堤がある。(壁に付けられている銘板に高さ 28mとある。)何故これほど巨大な堰堤がいくつもあるかといえばそれはこの谷が地質的、地形的に上流部に崩壊部をもち、出水の度ごとに砂礫や濁流を押し流す名前の通り(濁川)の谷だからなのだ。(登山大系の記述による。)

堰堤右端に手すりのついた急なパイプ階段があり、息を切らせて超える。河原におり、しばらく進むと左に緩く曲がり、そこに7mの滝が落ちている。「さあやるか。」

一気に戦闘意欲が高まる。水流際を登

る。取り付きが多少微妙なムーブだがあとは楽勝。小ゴルジュを過ぎると二段35mと称される滝が立塞がる。

水流右から行けそう。ロープをつけ取り付くが花崗岩の脆い岩で迂闊に掴めないし、ピンも打てそうにない。途中細いブッシュでランニングを取って中間で切る。さらに水流沿いに上がり、水流を浴びて落ち口に立つ。日差しはなく濡れるとまだ寒い。

岩のゴロゴロした沢筋を遡って行くと左から倉掛沢と出会う。本流側は見上げるような巨大な岩が塞ぐように鎮座している。それを超えるとゴルジュ状で、水流が細い段状に流れ落ちている。右岸の「リッジ」状を登る。

中々いい感じで進んでいくがゴーロに変わる。大小の岩が段状に堆積していて、それも今崩落したばかり、というような探りたて、新鮮な(?)岩ばかりで、両岸を見上げると如何にも崩れそうな不安定な状態が見て取れ、脇目もふらず、という感じで息を切らせて通過する。

両岸が狭まり、河原の岩が青いコケで覆われているのをみて漸く危険地帯を脱した事を感じる。

50mのナメ滝は三分の一ほど登るも上部はヌメリが酷く、水流を浴びそうなので右に逃げて上にでる。その先はナメになっていて意外な溪相で中々いい感じ。

現れる滝を快調に越えていくがそろそろ源頭か。岩ガボロボロで取り付きたくない滝を右岸の樹林帯から巻くと、正面がガレ・ルンゼになっていて、沢は90度左に折れる。傾斜のあるナメっぽい斜面を登るが左岸側は側壁となっ

ていてその間から水量の少ない滝が落ちていく。落差は20~30mはありそう。沢を忠実にツメるならこの側壁を回りこんでこの滝の上にでなければならぬが、ここまでくればさっさと稜線に上がる方がいいか。

で、そのままツメて行くと傾斜の急なルンゼ状となり樹林帯に入る。

大した労もなく稜線に上がり一息つく。二昔も前に登った時にはスズタケが密生していた記憶があるのだが今は殆ど見られない。(最近山の笹が枯れている、という話題をTVでやっていたがこれもそうなのか。)

さて下山ルートは日向沢を下降するつもりなのでともあれ日向山まで行かないとね。

樹林の下には薄っすらした踏み跡がありそれを辿って行く。小一時間も歩くと目の前に白くザレたピークが見える。コルから白い砂の堆積した斜面を登るが、ハイカーが次々と下ってくる。

間もなく頂上の一角に出る。南アの鳳凰山みたいに白砂に覆われたただっ広い所で「雁が原」と呼ばれている。展望もよく、日向山林道から簡単に登ってこられるのでハイカーには人気の山だ。この日も20人ほどのハイカーで賑わっていた。

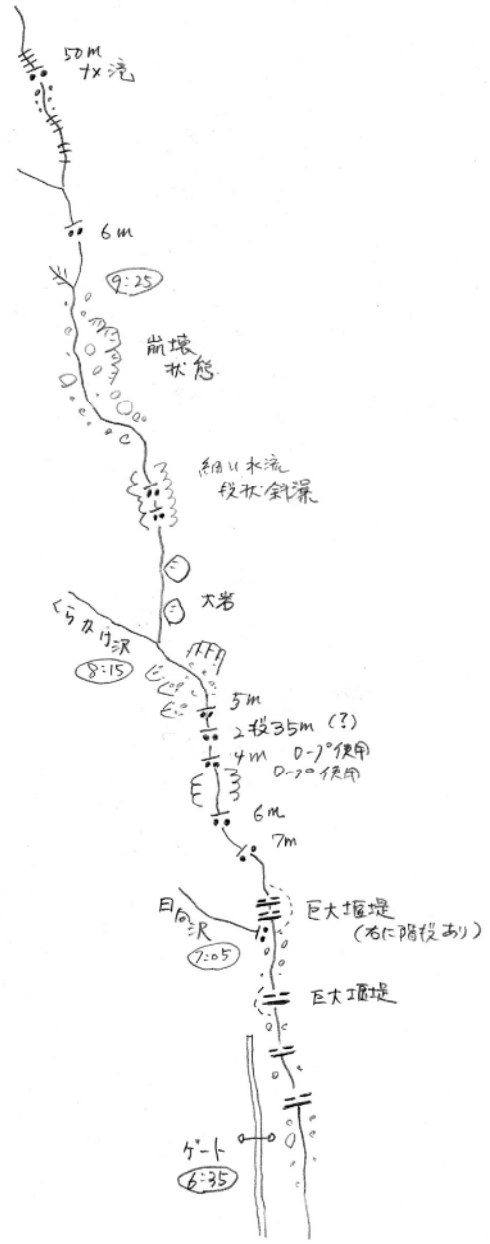
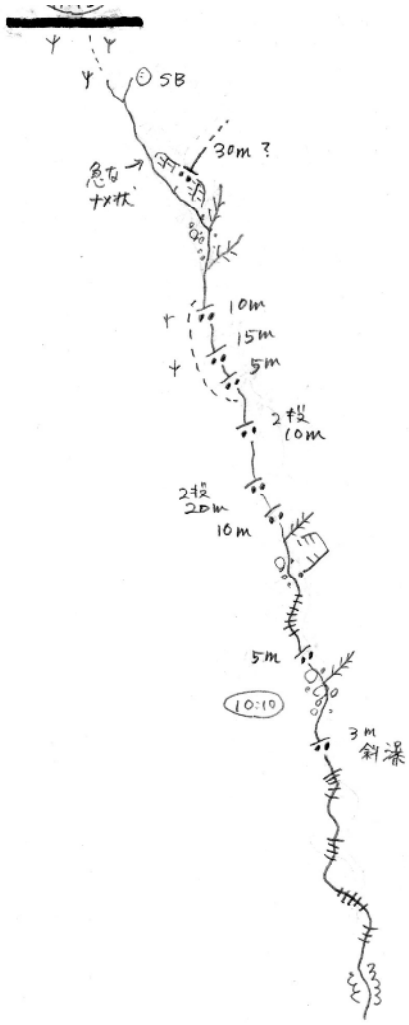
さて下山。先ほどのコルまで一旦下り登山道とは反対側を下り、日向沢に入る。砂と大小の岩の堆積した急な斜面で、砂と共にズルズルと滑り落ちる感じで、まるで富士山の砂走りの下りみたいだ。

日向沢自体は何もない沢で一時間ほどで本流の巨大堰堤のところに下り着き、林道を下って車に戻る。

自分の車の横に別な車が止まっており、帰り支度をしているとその車の持ち主も戻ってきた。釣師だった。

知人から釣れると聞いて来たのだが全く釣れず当たりもない、と嘆いていた。そりゃそうでしょう。こんな沢で釣れる訳がないね。

でも沢屋的には「登れる滝が結構あって面白かったですね。」という野澤君の言葉がこの沢の評価かな。



10年5月30日  
 鹿了前街・神宮川/濁川